

聖霊降臨後第18章目

「わたしを誰と云ひか」

ルカ7:18-23

(1)

今朝は、「来るべき方はあなたですか」「あなたはいかなる方ですか」「WHO ARE YOU」という疑問を抱いたバプテスマのヨハネに目をためめます。

「このはじまりは、7章18節です。」「ヨハネの弟子たちは、これらことをすべてヨハネに報告した」とありますが、「これら」とは、ヨハネの弟子たちが獄中にいたヨハネに、ガリラヤ周辺でなされた主イエスの宣教活動のことです。

その報告を受けても、なおも心のモヤモヤは晴れず、弟子の二人を主イエスの元に遣わして再度尋ねています。

「おいでになるはずの方は、あなたですか、それとも、わたしたちは『他の方』、『他のメシヤ・救い主』を待つべきなのでしょうか(7:19)。

ヨハネは、この時、「ヨハネ・アンテパス」の手により投獄されていた時です。投獄された理由は、ヨハネ自身の身を守るためでした。妻と息子三人、そして義理の母、さらに、多くの部下まで殺すという、ヨハネの大罪を指摘されたヨハネは、妻ヨハネヤと共謀して、ヨハネを捕えて、死海の東部・マケラスの地下牢に彼を投獄しました。

罪深いヨハネですが、クリスマスの度に登場

します。」「新しいユダヤの王がベツレヘムに生まれるというニュースを耳にしたヨハネは、ベツレヘム近辺の2歳以下の男子を殺害した」と言ひヨハネは、

歴史家のヨセフスによると、ヨハネの晩年は死者の亡霊に取り憑かれていたといわれています。」「夫こしまな者には、平安がない」とは、いつの時代にも変わらぬ真理です。

ところで、牢は牢でも、地下牢だった。わたしには獄中体験なるものはありませんが、病院体験ならわたしにもあります。

八年ほど前、ステーションのガンと診断されて手術を受け、3週間入院生活をしました。終始、肉体だけでなく、精神的な試みにあります。それでも患者同志は不思議と親しくなります。なかには、入院生活一年6ヶ月という方もいました。入院生活も長期になるとつらくなります。わたしが入院していた山口済生会病院の四階の患者のほとんど全てが、ガンの患者でした。一人一人の病状に違いはありますが、それぞれが生と死といやおうなじに向かい合うという、ギリギリの体験をしていますから、不安は隠せません。

わたしと同室であった下関の税関の重役さんは、すい臓がんでした。夜中、突然に、「死にたくない、」と切々と、闇の中からわたしに訴えてきました。

バプテスマのヨハネが、地下牢から、主イエスのもとに、弟子を遣わして真剣に尋ねたことと言えば、「おいでになるはずの方は、あ

なただですか。」と疑惑を抱へヨハネに対して、
主イエスは正面から向かい合われました。

今日まで、信仰者として、疑いも、迷いな
ど一つもありませんでした。」と云える」スー
パー信仰者」などがいるはずもありません。
そんなことを言えば、「自分にまっとう正直であ
りなさい」と注意されかねません。

多少の違いはあるでしょうが、一人一人は、
疑い、迷いの淵をアチコチ、さ迷い歩いて
きました。しかし、「主は、まさに倒れんとす
る者をささげ、すへて、かがむ者を立たせら
れます」(詩編145:14)とある御言の
ごとく、今日までわたしたちは支えられてきま
した。

生身のお互いですから、イエスに対して疑
問や疑惑をいだいたことなど一度もないと言
える信仰者がいるはずもありません。

「雨が降ってもハレルヤ」と言いたくても、
それはいきません。イエスとは誰なのか」と
戸惑う時、人知れず悩みます。しかも、生真
面目で熱心な人であればあるほど、アッパ
ンドダウンの経験をしてきたのです。

ヨハネは、迷い・疑いはじめた時、弟子二
人を主イエスのところに遣わして、直接イエ
スに尋ねておられます。「来るべき救い主はあな
たですか?」他にどのような人を待つべきで
しょうか?。真剣な問いです。

「アルバート・シュバイツァー」は、アフリ
カのジャングルの奥地で医療奉仕をしたこと
は知られています。しかし、彼がアフリカに

行く前の三年間、ドイツの国会図書館に閉じ
こもり、「イエスというお方は誰か」という課
題と徹底的に取り組み、約千冊の関連した本
に目を通し、「イエス伝研究史」を書き上げた
といえます。「イエスこそまことの救い主であ
る」ということを確信した彼は、30歳を境
に医学部に入学し、イエスの愛を今度は自ら
実践するため38歳で医学博士を取得し、医
療活動の為にアフリカに向かったといえます。

(2)

「イエスとはいかなる方が」、このきわど
い疑惑に対して、主イエスは、「わたしがそれ
だ」・「わたしがメシヤである」と自らをすへ
に明らかになさるお方ではありません。

不親切ではありません、無愛想なわけでもあ
りません、もったいぶっているわけでもあり
ません。いいえ、そんな思いからではありません。
不思議なほど、主イエスは、「わたしは
キリストです」・「わたしはメシヤです」・「わ
たしは、あなたがたの待望していた救い主・
メシヤである」と自らの身を明らかにしたこ
とは、四つの福音書のどこを見ても見当たり
ません。それこそ、「メシヤのトップシークレ
ット」でした。「メシヤの秘密」と言われてき
ました。

さらに驚くことがあります。マタイ24章
23節を見ますと、「だれかが、あなたがたに、
『見よ、ここにキリストがいる』『また『あそ
こにいる』と言っても、それを信じてはなら
ない』との注意が向けられています。

もし、自分こそは救い主であると名乗り出すような人物があらわれたら、信じてはいけないう警告しております。

20世紀には、メシヤと名乗る人物があらわれました。「わたしはメシヤの再来」と名乗りはじめたのは、ご存知、韓国のカルト集団「統一教会の「文鮮明」教祖です。

例えば、主イエスに、「あなたはどなたですか」と尋ねたとします。すると必ず、「あなたは、わたしをどう思うのか」と問い返されます。同じことを、ヨハネに対しても致しました。「誰と思うのか」と聞えば、「あなたは」「あなたとしては、わたしをどう思うのか」と問い直されます。

マタイ16章の「カイザリヤ・ピリポ」においてもそうでした。「人びとは、そして、弟子のあなたがたは、わたしを誰と言いますか」(マタイ16:13-15)と問われています。それは、自分としては、どう信じ受け止めているのか、と念を押して、「ファイナル・ファンサー」を求めておられます。それにしても、主イエスと向かい合う姿勢は、二歩前進、一歩後退の感があります。

あの人、この人がどう信じているか、などはどうでもいいのです、あなたは、「ナザリヤ人イエス」をどう信じているのか。まわりがどういってあります。まして、紋切り型に告白すれば、それで良いというものではありません。

「主イエスを救い主です」と告白するのは、

自分の全てを込めて応答すべきことであります。

(3)

ルカ福音書の7章を、もう一度、注意深く読み直します。初めに、百人隊長の「しもべ」のいやしの記事がありました。次に、ナインにおいて、母親の息子が死んで蘇生した出来事がありました。二つの奇跡は、イエスは、約束の救い主、メシヤであるとの「こゝろ」・「証明」・「証拠」としての奇跡がなされました。それに続く18節で、獄中にいたヨハネは、弟子を派遣して「きたるべき救い主はあなたですか」と主イエスに問いました。

派遣した弟子たちがもたらした主イエスの返答といえば意外とも言えるものでした。

「盲人が見えるようになり、足が不自由な人が歩き、らい病人がきよめられ、聾者の人が聞こえ、死人が生き返り、貧しい者に福音が宣べ伝えられています。だれでも、わたしにつまずかない者は幸いです」「このことを、あなたがたが行って自分たちの見たり聞いたりしたことを、ヨハネに報告しなさい」。

これが主イエスの返事でした。病めるもの、貧しいもの、死の陰におびえている者、そうした暗黒の中に住んでいる民、死の地、死の陰に住んでいる人々に「天の御国は来た」と証言していた「わたしナザリのイエス」の様子を伝えなさい、とヨハネの弟子たちに命じたのです。

それから、主イエスは群衆に向き直り語り始

めました。

「では、あなたがたは、何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦でなかつたら、何を見に行ったのですか。柔らかな着物を着た人ですか。きらびやかな着物を着て、ぜいたくに暮らしている人たちなら、宮殿にいます。でなかつたら、何を見に行ったのですか。」「そうではないでしゅう」という強い反論が言外から伝わってきます。

ヨハネは、風に揺れ動く葦のごとき不確かな存在ではない。ふらふらして自分の使命を見失うような人物ではない。「きらびやかで、柔らかな着物を着ていたような人物」ではない、と主イエスは明言されました。

ヨハネの普段の容貌といえば、「らくだの毛ころもを着物にし、腰に皮の帯をしめ、いなこと野蜜とを食物としていた」(マタイ3:4)のであります。

さらに、主イエスは、群衆に向かって「ヨハネでなかつたら、何を見に行ったのですか。預言者ですか。そのとおり。だが、わたしが言います。預言者よりもすべれた者です。その人こそ、『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう。』と書かれているその人です。あなたがたに言いますが、女から生まれた者の中で、ヨハネよりもすべれた人は、ひとりもいません。しかし、神の国で一番小さい者でも、彼よりもすべれています。」

福音書の中で一番難解な箇所です。言われて

いることは最大級の誉め言葉をもって、ヨハネは預言者としての使命を果たしていると評価なさっています。

その後、ヨハネは、「この方こそ、」来るべきメシヤ」「世の罪を取り除く神の子羊」との確信に至ります。しかも、「わたしはおどろかぬ、彼は栄える」「これが自分の使命である」と確信します。

ナザレ人イエスこそ、人となった真(まこと)の救い主であると確信した洗礼者ヨハネは、その後、イエスを指し示す「指」そのものになりました。

主イエスは、重ねて、「わたしにつまずかない人はさいわいです」とおっしゃいました。

ヨハネは、戸惑いながらも、ナザレ人イエスこそはまことの救い主、長年待ち望んでいたキリスト、メシヤであるとの確信に導かれた。

わたしたちは、どのような「救い主」を求めているのでしょうか、多くの人は、人より少しでも上に上りたいと、「上に登る歌」を歌っているのではないのでしょうか。しかし、主イエスの在り方、生き方は、どうもそれとは反対のようです。上に上ろうとは考えておられません。約束の救い主は、低きにつかれるお方でありました。

「中森幾之進」という東京の山谷で生涯伝道した牧師がおりました。この方は「下へ上るうた」というタイトルの本を出版しました。

それにしても妙な題名です。

山谷においてイエス様を宣へ伝えていようと、
「上へ上へ」といふ妙な思いが生まれてきた
と言います。下がること、低きにうつくもの
を、上るのではないか、そう考えた考えが、山
谷で伝道するうちに示された、といふのです。
上から下にうつうのなら分かります。下から
上に上がるといえば、それはイエスキヤの「あ
りかた」・「生き方」ではないか、イエスキヤ
のなされた伝道とは、限りなく下に向かうも
のでありながら、ついには、天に向かって上
昇しているからであります。中森牧師は、救
い主イエスキヤの在り方・生き方をこのよう
に学んだようです。

「自分こそは救い主である」といふことを、
どう証明したらよいのでしょうか。

しかし、世にも稀(まれ)なる人がいました。
「この人を見よ」と言える人です。

「救い主とはどのようなお方ですか」と尋ね
られたとします、説明しても分からなければ、
この礼拝にわたしたちと共についていただくお
方です、と指し示すしかありません。「一度、
周東のぞみキリスト教会にいらしてくだされ
い」と言えるまでになりたいものです。

「由木康牧師」の作詞による「この人を見よ」
を皆さんと讃美したいと思います。

「救い主とはどのようなお方ですか」と尋ねら
れたら、「す」す」といふ「と」とは、どうした生き方
をなされたお方ですか」と「この人を見よ」と
言わざるを得ませんでした。

「馬槽の中に、産声(うぶごゑ)上げ、大工

(たくみ)の家に、人となりて、貧しき憂い
(うれい)の、生(な)るる悩み、つばなになめし、こ
の人を見よ」

「食する暇も、うち忘れて、虐(しいた)げ
られし、人を訪ね、友なき者の、友となりて、
心碎(こ)きし」この人を見よ」

「すべてのものを、与えしすえ、死のほか何
も、報いられて、十字架の上、上げられつ
つ、敵を赦(ゆる)し、この人を見よ」

「この人を見よ、この人にこそ、よなき愛
は、現(あら)われたる、この人を見よ、この人こそ、
人となりたる、活(い)ける(神)なれ」。

母マリヤより生まれ、ナザレの大工の息子と
して育つた、イエスとはいかなるお方ですか、
と問われれば、「この人を見よ」と指し示す他
ないではありませんか。すべてのものを与え
し末とありました。わたしたちもまた、すべ
てを献(たま)げてお従(したが)うものでありたい、と思
わされます。

【祈ります】

今朝の聖書箇所は、難解な箇所ですが、それ
でも、忍耐して、みなさんと目をとめてきま
した。ヨハネのまじめな疑問を正面から受け
止めて下さった主に感謝します。迷い疑いな
がらも、正しい「救い主」の理解に導いてく
ださい。

主イエスキヤの名により祈ります。

「アーメン」